

家畜衛生研修会（病性鑑定病理部門，2007）*†
 における事例記録（Ⅷ）

Proceedings of the Slide-Seminar Held by the Livestock Sanitation Study Group
 in 2007 Part Ⅷ*†

（2008年2月1日受付・2008年5月1日受理）

43 死産牛胎子の腹腔腫瘍

〔中谷英嗣（山口県）〕

黒毛和種，雌，0日齢（胎齢284日），生後2時間。
 2007年2月中旬，約330頭を飼養する肉用牛一貫経営
 農家で死産がみられた。

剖検では，子宮付近に小児頭大の腫瘍が認められた。
 腫瘍は厚い結合織に覆われ，内部は薄い被膜により大小
 に区画され，桃白色の混濁液を満たしていた。小脳は融
 解していた。その他の臓器に著変はみられなかった。

組織学的に，腫瘍は線維芽細胞の増殖や血管の介在お
 よび出血を伴う結合組織により包まれ，結合組織の間質
 による胞巣状構造を呈していた。結合組織の間には円～
 楕円形で，クロマチンの豊富な小型の核と細胞質の乏し
 い細胞や淡明核と弱好酸性の細胞質をもつ細胞が腺様構
 造をとり（図43A，B），これらの細胞はPAS染色陰性
 であった。腫瘍の深部には死後変化もみられた。その

他，片側性の脳室の拡張と小脳虫部の扁平化がみられ
 た。

病原検索では，主要臓器から細菌は分離されなかつ
 た。死産胎子の血清，脳脊髄液および主要臓器からのウ
 イルス分離は陰性，血清学的検査では異常産関連ウイル
 ス抗体は2倍未満であった。遺伝子学的検査ではアカバ
 ネ，アイノ，牛ウイルス性下痢ウイルスの特異遺伝子は
 検出されなかった。

本症例は，死産牛胎子の腹腔腫瘍と診断されたが，類
 症鑑別について議論され，奇形腫，過誤腫，あるいは
 Haemolymphoidの可能性も考えられた。

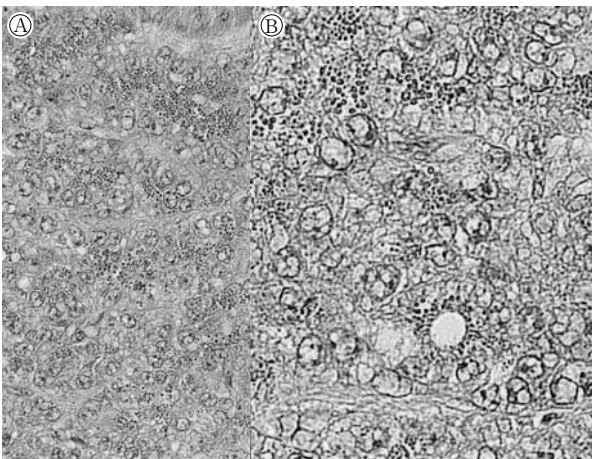


図43 間質により区画された腺様の配列をとる腫瘍内の
 細胞（HE染色 A×200，B×400）。

※以降、詳しくは日本獣医師会雑誌Vol. 62 No. 7をご覧ください。

* (脚)農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所 (〒305-0856 つくば市観音台3-1-5)

* National Institute of Animal Health (3-1-5 Kannondai, Tsukuba, 305-0856, Japan)

† 連絡責任者：芝原友幸 (脚)農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所)

〒305-0856 つくば市観音台3h1h5 ☎・FAX029-838-7774 E-mail : tshiba@affrc.go.jp

† Correspondence to : Tomoyuki SHIBAHARA (National Institute of Animal Health)

3h1h5 Kannondai, Tsukuba, 305-0856, Japan

TEL・FAX 029-838-7774 E-mail : tshiba@affrc.go.jp